「雀の子を犬君が逃がしつる…」―源氏物語入門・紫上という女君―

国語科　中村淳子

清げなる大人二人ばかり、さては童女ぞ出で入り遊ぶ。中に十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て、走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひさき見えて、うつくしげなる容貌なり。髪は扇を広げたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。　「何ごとぞや。童女と腹立ちたまへるか」とて、尼君の見上げたるに、すこしおぼえたるところあれば、「子なめり」と見たまふ。

「雀の子を犬君が逃がしつる。伏籠のうちに籠めたりつるものを」　とて、いと口惜しと思へり。（本文は源氏物語の世界　http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/より引用）

この場面は、源氏物語入門教材として、多くの教科書に採択されることが多い「若紫」巻の一節です。視覚的にも美しく、たいへん有名な場面ですが、ここで、源氏物語を知らないみなさんにこの場面の説明をしましょう。

若き光源氏は、病気にかかり、京都北山に療養に来ています。今の感覚で言えば、ストレスと過労のため、日本が誇る超美男のＧａｃｋｔ様がお忍びで、軽井沢に保養中…という感じでしょうか。ＶＩＰ待遇の病院の特別室で寝ているのが嫌になった光源氏は、お付きの者の目を盗んでお散歩に出かけます。そこで、若き日の紫上と出合い、心密かに思いを寄せている藤壺（実父の後妻）と幼い紫上との容姿が似通っていることに、驚き、はらはらと涙を流すのです。

思春期真っ盛りの更級日記の作者、菅原孝標女がこの場面を読み、「なんて素敵！このお話の続きが読みたいわ！お願い、続きを読ませてください！」と仏様にお願いし、源氏物語入手後は、何もせずに源氏物語だけを何度も何度も読み返したのは有名な話です。

私は長年、なぜ、この場面が高校生における最初の入門教材として取り上げられるのかと疑問に思い続けてきました。恋愛の一つの形としては興味深い光源氏と紫上との出会いの場面ですが、果たして、この場面の光源氏に、多くの人が切実に共感できるでしょうか。

平成調に翻案すると、容姿端麗頭脳明晰な、自分の若い義理の母親に道ならぬ想いを抱く青年が、彼女にそっくりな、まだあどけない少女に目をつけて、執着するという不謹慎なお話になるのです。

この場面は、光源氏が小柴垣から垣間見た情景として描かれています。視点人物が光源氏ですから、読み手は光源氏の想いに沿ってこの場面を読むことを要求されます。しかし、藤壺に対する光源氏の想いを中心に据えるのではなく、尼君と若紫を第三者として客観的にながめる視点にたったとき、この物語は紫上という一人の女性の運命を問いかけるものになるのです。ここで、少し紫上の境遇をお話ししましょう。

紫上には母はいません。彼女が幼い頃に亡くなったのです。紫上の父は現在、他の妻や、その妻との間にできた多くの子どもたちと家庭を築いています。だからこそ、若紫は、一人、祖母尼君に引き取られて暮らしていたのです。

この場面で紫上は「走り来たる女子」として息せき切り、泣きじゃくりながら登場しま

す。「雀の子を、犬君（幼い召使いの名前）が、逃がしちゃった…」と。

平成に生きる私たちには小学4年生ぐらいの女の子が母親の元に泣きじゃくり、走って何かを訴えにくるのは、ごく普通の風景です。しかし、時代を平安時代に逆行してみるとその風景は違った意味合いを持って私たちの前に立ち上がってきます。

平安貴族の女性はその一生をほとんど室内で過ごしました。移動するときは膝行します。立ち姿は、はしたないとされた時代だったのです。ここでは、若紫が「十ばかり」（満年齢なら8~9歳）の少女であるとしても、この時代の成人式は女性の満年齢で12～13歳で行われていたことに注意してください。

このような背景をふまえてこの場面の若紫の姿を見たとき、彼女はたぐいまれな美少女でありがなら、貴族女性としての身だしなみや立ち居振る舞いをほとんどしていないことに気づきます。そこに読み取れるのは、年齢の割には自由奔放な、いわば教育という名で貴族女性に囲い込まれる前のありのままの命のきらめきを見せている若紫の姿なのです。

尼君はそのような無垢な若紫の髪をなでながら愛おしみ、涙を流します。「私が先の知れぬ病にかかり、いつ、あなたを残して逝くかもしれない状態ですのに。あなたがたいへん、たわいなくていらっしゃるのが、愛おしく、おかわいそうで、気がかりなのです。これぐらいのお歳になれば、もうすこし大人になる方もいらっしゃるのに…」と。

私はこの場面の尼君の姿を見て、はっと胸をつかれました。尼君も又、北山で療養中の身なのです。そして、尼君の病は、たぶん、直る見込みのない病。自分は年老い、病を得、いつ死ぬかもわからない。父親はこの子の母親の死後、ほとんどこの子を顧みない…。あどけなく、頼りない子どもをあとに残し、先立たなければならない尼君の若紫の将来を憂う気持ちは一千年の時を隔てて、現在に生きる私の胸にも響いたのです。

藤壺を慕う光源氏の視点から描かれたこの場面ですが、このように無垢な若紫と、自分の死を意識している尼君に焦点をあわせたとき、のどかな北山の春の景色は美しくも悲しみを秘めたものに転化します。

その後、尼君はその予感通り若紫を残して死にます。

若紫を将来の妻にしたいと望む光源氏は、尼君の死後、若紫を密かに迎え、自邸に隠し据え、藤壺の身代わりの理想の女として育てます。実は紫上は藤壺の姪でした。だから紫上は藤壺に生き写しだったのです。

その後、紫上は容姿の美しさもさることながら、そのたぐいまれな性格の良さと心遣い、すぐれた教養、つまり個人の美質と後天的な努力により、光源氏の愛を一身に集め、源氏物語の中で理想の女君、最も幸福な女君として物語の世界に描かれていきます。

源氏物語第一部の光源氏の女性遍歴は藤裏葉巻で一端は終わりを迎えたかのようにみえなす。光源氏は紫上を最愛の妻として正妻同様に扱い、彼女がやっとほっと一息ついた瞬間に、光源氏は紫上を裏切ります。容貌も心ばせも完璧といわれた紫上ですが、彼女の唯一の弱みは、子どもを持てず、正式な結婚式をあげることなく光源氏の妻にされたが故に、正妻としての格式がないことでした。

そこに物足りなさを感じていた光源氏は、腹違いの兄の朱雀院の嘆願で、その娘の幼い女三宮を正妻に迎えました。光源氏は、女三宮もまた、紫上と同じく藤壺の姪であったこ

とに心動かされてしまったのです。

不安定な光源氏の愛だけをたよりに生きていた紫上は、光源氏が女三宮を正妻に迎えたことで大きなダメージをうけました。それは足下から自分が信じ、よりどころにしていたものが崩れ落ちた瞬間でした。

一方、光源氏が大きな犠牲を払って、得た女三宮は、ただ幼いだけの女性でした。未成熟な女三宮を正妻に迎えたことで、光源氏は紫上への愛をかえって深めていくのですが、もはや紫上と光源氏は心が通い合わない存在になっていきます。

しかも、女三宮は後に、その幼さゆえに柏木という男と過ちを犯します。光源氏は女三宮の過ちを知りながら、不義の子薫を表面的には実子として抱かなければならない苦さをかみしめるのです。

女三宮降嫁後、紫上は周囲に気を遣い、感情を表すことなく、孤独の中で耐えに耐え抜きます。その中で紫上は激しい苦悩と絶望のうちに死に至る病にかかるのです。

晩年、紫上はこうつぶやきます。女ほど、心の中にばかり思いをこめて、身の処し方も窮屈で、痛ましいものはない…。つまらぬ身には過分な幸と、よそ目には思われようが、心のうちでは何とも耐えきれないような大きな悲しみだけが、私の生きてゆくただ一つの支えになっている…。と。

紫上は源氏物語の中で最も幸福な女性とされた女君でしたが、最も不幸な女性でした。「若紫」巻で「走り来たる」ことで鮮やかで奔放な生命のきらめきを我々に見せた無垢な若紫は、言いたいことを言葉にすることもできず、本当にやりたいこともできずに「消えゆく露」のように幻のような人生を終えます。実に皮肉なことですが、光源氏は自分が心から愛していたのは、藤壺ではなく、紫上その人であったことを、その時になってはじめて悟ります。紫上の死後、生きる気力を失った光源氏は静かに物語の世界から姿を消します。

若紫巻の雀の子は伏籠の中から自由に羽ばたきましたが、その後の若紫を待っていた運命は、平安時代の一貴族女性として、部屋の中に閉じこめられた日々でした。

紫上は源氏物語という作品を通して読み手である私たちに語りかけます。

「人間はなぜ、生きているの？私が生きている意味は何？」と。

そして、この大きなテーマは光源氏の死後も宇治十帖の世界で大君・浮舟という女性たちに受け継がれていくのです。

源氏物語の中で、その一生がつぶさに描かれている人物は、光源氏の他には紫上しかいません。紫上の物語を軸に最後まで源氏物語を読み通した時、自然で無垢な生命のきらめきを放ち「走り来たる」躍動感あふれる若紫の姿は、万感の思いをもって胸に迫る存在となるのです。